

キリスト教に対する「誤解」

望 月 康 恵

日本では、キリスト教をはじめ宗教を信じることにについて、慎重な意見が時に聞かれる。キリスト教への懸念は、次のようにまとめられるだろう。①クリスチャンになる人は清廉潔白である（あるいはそうなることを目指している）、②聖書には「してはいけないこと」が沢山書いてあって、クリスチャンになると、規律の多い「窮屈な」人生を送らなければならないようだ（そのような人生を歩むことはとてもできない）、③一つの宗教を選ぶこと自体が非寛容であって、歴史上も、多くの争いが宗教の名の下に行われてきた。したがって宗教にコミットすることは避けたほうがよいのではないか。

キリスト教に対するこのようなイメージは、誤解に基づいており必ずしも的を射た指摘ではない、と感じることが多い。①クリスチャンの中で自身を清廉潔白だと思っている人はおそらくほとんどいない（であろう）。むしろ自分は不完全でありながら、そしてそれはクリスチャンになっても変わらないけれど、神から愛されていることがわかった。②聖書には規律が多く記されているが、そもそも人間はルールを守れない。（中央芝生の「球技禁止」のサインをご覧ください）。規律は、人間が社会の秩序を維持するために必要なものであるし、すべての社会にある。社会あるところに法あり、である。③たしかに世の中には、宗教の名の下に争いが起きている。ただし宗教を利用して紛争が生じている場合も多く、つまりは人間の行為である。他方で信仰によって多くの偉業も日々なされているものの、このような慎ましいまた尊い行為については、ほとんど注意が払われていない。さらに、人生は毎日が選択であり、学校も仕事も家庭も「一つ」あれば足りる。重要な点は、何を選ぶか、そしてそれを、生活の中でどのように育てていくのか、ではないだろうか。

ところで、数ある宗教の中でキリスト教の特徴は何だろうか。それは、社会の因習から個人を解放する力であろう。神という存在の前で、どのような人も平等であること、また神によって愛されているという真理と確信をキリスト教は示している。このような確信と共に人生を歩めることは、幸せである。

（法学部教授）